

港区の伝統工芸

琵琶

Japanese lute

演奏者の個性を引き出す音をつくる

琵琶の起源は、ペルシャ、インド、ベトナムであるといわれています。中国・朝鮮半島を経由して、奈良時代に日本に伝来し、独自の発展を遂げました。



四世
石田 不識 氏
Fushiki Ishida
(石田 勝男 氏)
(港区虎ノ門3丁目)

日本広しといえど、全て手作りで琵琶をつくる職人は、港区名譽区民であり、人間国宝である石田不識さん、ただ1人のみです。

「琵琶は演奏者の声とのバランスも大切です。昔の名器といわれる音に近づけるのは、並大抵のことではないので、いまだにでき上がった琵琶に弦を張って音を出すときは緊張します。」と琵琶の理想の音を追い求める姿勢を感じさせてくれました。

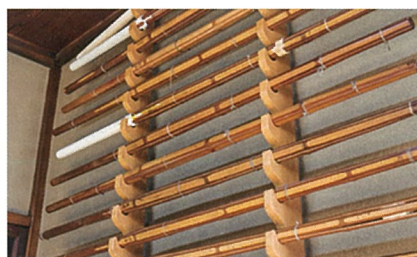
制作者に聞く

剣道具

Kendo-gu (Protective equipment for Kendo)

職人の技が日本の伝統を伝える

剣道具が作られるようになったのは、室町時代後期の頃からです。江戸時代後期になり現在とほとんど同じ竹刀が作られるようになると、武士の間に広まっていきました。幕末には、それまで異なっていた竹刀の長さも統一され、明治時代になると防具もほとんど今と変わらない形になりました。



飯塚 尚昭 氏
Naoaki Iizuka
(港区芝3丁目)

創業は明治、100年以上の歴史の飯塚剣道具店、4代目が飯塚尚昭さんです。「機械縫いは一見、目も細かくきれいに仕上がっていますが、その分、硬いです。手縫いだと、適度な柔らかさを持たせられるので、頭に受ける衝撃を吸収してくれます。」ひとりひとりの体型、体格に応じ手仕事の剣道具は全て注文品となります。寸法は計らなくてもわかるほど匠の技が光ります。

制作者に聞く

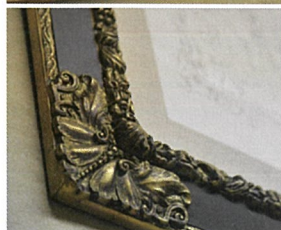
額縁

Picture Frames

画をきわだたせる美をつくる

額縁の原型は、古代ギリシャにすでに存在していたといわれています。洋額縁が日本で本格的に作られるようになったのは、明治初期になってからのことです。洋額には細かな模様が入り、この模様は木彫りや飾り型をつけることによって表現します。

今日では、絵画や壁との調和も要求され、額縁自体も絵画作品の装飾美術として重要視されています。



大江 洋一 氏
Yoichi Oe
(港区六本木4丁目)

六本木交差点を溜池方面へ10分ほど歩いたところに伝統的な額縁を作る「大江額縁店」があります。先代の父親は、明治の頃に芝愛宕町にあった額縁専門に一貫制作する工房で修行されたそうです。現在、額縁も既成のものが主流となり、せっかくの伝統技術も次代には継承することが難しいとのことですが、「手作りのニーズがある限り、作り続けていきます。」と語られました。

制作者に聞く

港区の伝統工芸

江戸表具

Edo mounting

変わらぬ伝統の美をつくる

表具という技術は、遣唐使などの手によって中国からもたらされたといわれています。
 経典・仏画などの表装の需要が多く、一般に職人は経師と呼ばれてきました。
 時代とともに、掛軸や屏風、襖、巻き物、額装なども扱うようになり、表具師と呼ばれるようになりました。



制作者に聞く



伊藤 良雄 氏
Yoshio Ito
(港区三田2丁目)

大正の終わりに創業した装演堂。伊藤良雄さんは、今も変わらぬ江戸表具の伝統技術を守る2代目です。伊藤さんの仕事に関する自己評価は厳しく、「つくるごとに反省点は残ります。次はここを工夫して、良いものにしていこうと、自分なりに考えてやっています。」といひます。伝統技術を受け継ぐだけではなく、そこに少しずつ改良を加えているそうです。



湯山 富士雄 氏
Fujio Yuyama
(港区芝1丁目)

「初代は武士でした。その後、手が器用だったのでしょう、経師屋を開いたんだそうです。」と孫であり3代目の湯山富士雄さん。従来の日本家屋に根差した表具技術は、建築様式の変化などで従来の手法では合わない部分も出てきています。多様化する要望に合わせるのも大切であるといひます。「伝統工芸のいい部分を残して現在のニーズに合わせていけば、やがてそれが伝統となる。」職人として、経営者として、伝統工芸に新たな光りを見い出しています。

金・銀細工

Gold and silver works

世界でひとつの珠玉をつくる

金・銀細工は、金・銀・プラチナなどの貴金属を加工し、装飾品などを作り上げる大変細かい仕事です。
 金・銀細工は、平安時代、寺院等の建築金具などを作る飾り職人の仕事から始まったといわれています。
 江戸時代には刀のつば、明治時代にはかんざし・帯留めなどと時代の変化とともに製品も変わってきました。
 現在は、指輪・ネックレス・イヤリング等が中心となっていますが、今も全て手作業で製作しています。



鶴岡 丈士 氏
Takeshi Tsuruoka
(港区麻布十番1丁目)

鶴岡さんは、昭和の初めから麻布十番で金・銀細工を作る「ジュエリー工房ツルオカ」の3代目です。金・銀細工の仕事は、大変細かい作業が多く、全神経を集中させて行ひます。そんな大変な作業を続けている鶴岡さんは「手作りで地金から一品一品仕上げていく仕事は、楽ではありません。でも、このやり方が好きなのです。」と、仕事に対する情熱を感じさせてくれました。

制作者に聞く

三味線

Samisen (Three-stringed lute)

昔ながらの音の美をつくる

三味線は、1562年に琉球（沖縄）から大阪の堺に渡来した蛇皮線を当時の琵琶法師・石村検校（けんぎょう）が改良工夫して、現在の犬や猫の皮を張るようにしたものだと伝えられています。

三味線が他の弦楽器と違うところは、胴を棹が貫いていることです。また、胴に皮を張るため、皮の張り方ひとつで音色が全く変わってしまうそうです。

構造は、天神、棹、胴からなっており、胴の材料は花梨、棹は、花梨・紫檀・紅木などで、特に紅木は最高のものといわれています。



制作者に聞く



伊東 良継 氏
Yoshitsugu Ito
(港区新橋3丁目)

伊東さんは、昭和の初めから新橋にある三味線の老舗「石村屋」の2代目ご主人です。20代の初めに先代と共に仕事を始められ、今は息子さんとお仕事を続けられています。伊東さんは「今でも先代の三味線が目標です。そして、見た目も美しいもの。三味線は音色も重要です。ほとんどがお客様からの受注生産である三味線ですから、お客様の個性に合うものをこれからも心をこめて作っていきます。」と、伝統を守っていく気概を感じさせてくれました。



星野 芳夫 氏
Yoshio Hoshino
(港区三田2丁目)

星野さんは、子どもの頃から三味線作りを手伝い、現在は三田2丁目「(有)三田菊岡」の3代目として伝統技術を磨いています。星野さんの三味線作りの信条は「奏でる人に合わせたものを作ること。製作工程の中で、どれかひとつでも出来が悪いと、いい三味線はできない。それだけに、すべての工程で入念に完璧を期して作っています。」と、三味線作りに対する熱意が伝わります。

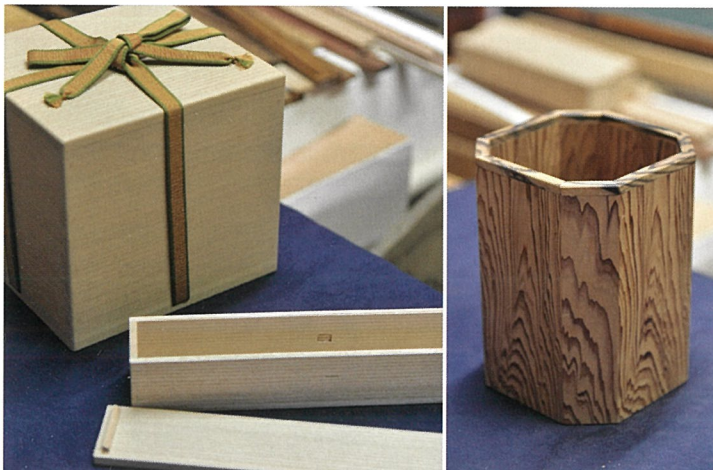
指物

Sashimono

積み重ねられた正確な技がこだわりの美をつくる

指物の「指す」は「差す」ともいい、物差しで板の寸法を測り、板と板をしっかりと組み差し合わせ、ふたや引き出しのある箱物類を作することをいいます。

その歴史は、平安時代まで遡ります。京都を中心とした華やかな宮廷文化の中で、大工の手で作られたものが始まりとされています。



丹羽 孝太郎 氏
Kotaro Niwa
(港区東麻布1丁目)

現在3代目を継いでいる丹羽さんは幼い頃から父親の作業を見て覚え、「先代からは後を継げと言われたことはありません。なるべくしてなった職業。」といいます。「一番難しいのは正確にはめ込む事です。」板と板を釘を使わずに組んで差し合わせる指物師は、少しの隙間なく、正確に箱を作る技術が要求されます。まさに長年の技術による職人としての勘所によるものです。

制作者に聞く

Japanese lute (琵琶)

It is said that the Japanese lute ("biwa") originated in Persia, India, and Vietnam. Arriving in Japan through China and the Korean Peninsula during the Nara period, the instrument had developed in its own unique way.

Kendo-gu (Protective equipment for Kendo) (剣道具)

Kendo-gu (protective equipment for kendo) was first produced in the latter half of the Muromachi Period. It became popular among samurai in the latter half of the Edo Period when the bamboo swords were similar to those of today. By the end of the Edo Period, the length of bamboo swords was standardized and the protective equipment for kendo has remained unchanged since the Meiji Period.

Picture Frames (額縁)

The prototype for picture frames is said to have originated in the Greek period. Western style picture frames were first created in Japan in the early Meiji era. The frames were decorated with detailed patterns, sometimes taking the form of carved wood.

Today, they are required to harmonize with the painting, as well as with the walls they are to hung upon, and occupy an important place as works of art independently, along with the paintings they adorn.

Edo mounting (江戸表具)

It is said that the original technique of mounting was brought to Japan from China by the members of official missions to China during the Tang dynasty. The artisans were popularly called Kyo-shi, or sutra men, because their work was mostly centered on mounting Buddhist sutras and paintings.

As time passed, they also applied their techniques to hanging scrolls, screens, sliding doors, scrolls and art frames. Hence they came to be called Hyogu-shi or mounters.

Gold and silver works (金・銀細工)

Gold and silver works is the extremely detailed art of creating decorative items out of gold, silver, platinum or other metals.

It is said to have originated in the Heian period(8th-12th centuries) when skilled gold and silversmiths began to decorate the metal fittings of temples, etc.

Products have varied in accordance with the demands of the times, such as the guards on samurai swords during the Edo period and delicate ornamental hairpins and obi sash clips during the Meiji period.

Today, although work centers around rings, necklaces and earrings, they are all purely hand-made.

Samisen (Three-stringed lute) (三味線)

It is said that Samisen was invented by Ishimura Kengyo who was a "Biwa Hoshi(lute priest)" at that time and it was based on Jabisen(similar to the Samisen but using snake-skin) which was brought over from the Ryukyu Islands(Okinawa) to Sakai in Osaka in 1562.

After his device, cat-skin or sound chamber. Also, as both sides of the body are covered with separate skins, the timbre differs depending on the strength of the stretched skin.

Samisen comprises a body, a beam and a top part. The body is made of Karin(Chinese quince), and best material.

*Kengyo is a title expressing official class among the blind, use after Muromachi shogunate

Sashimono (指物)

Sashimono refers to creating boxed-shaped items with lids or drawers made by taking measurements of boards with a ruler and carefully putting together the boards. Its history dates back to the Heian period.

The beginning of these are said to be items that were made by carpenters in the luxurious court cultures mainly in Kyoto.